HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ボヘミアン・ラプソディ殺人事件 ： 殺されたのは誰？（No.1）
著者	三浦，京子; MIURA，Kyoko
引用	北海学園大学学園論集(181)： 1-31
発行日	2020-03-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

ボヘミアン・ラプソディ殺人事件

―― 殺されたのは誰？（No.1）――

三　浦　京　子

序　章

Is this real life?	これは現実かしら？
Is this just fantasy?	それとも幻？
Caught in a landslide	地滑りにあったみたい
No escape from reality	現実から逃れることはできない
Open your eyes	目を開けて
Look up to the skies and see	空を見上げてごらんよ
I'm just a poor boy, I need no sympathy	僕は哀れな子，でも同情なんかいらない
Because I'm easy come, easy go	気ままな人生だから
A little high, little low	いい時もあればそうでない時もあるさ
Anyway the wind blows, doesn't really matter to me, to me	どっちみち風は吹くんだ　どうってことないよ

イギリスのロックバンド Queen[1] が歌う『ボヘミアン・ラプソディ』[2] の冒頭。作曲者フレディ・マーキュリー（1946～1991 年）[3] は，主人公の少年に衝撃的な真実を突き付ける。一瞬にして崩れ落ちる足元。危うくもかろうじてしがみつく現実世界。指先に残る気ままな生活の思い出。人生は始まったばかりなのに，現実から引き離されて未知なる世界に落下する。あたかも大海原に漂うけし粒のように無力な一点。濁流に飲まれて消えてしまおうと，気づく者さえいない孤独な存在。人生の意味を理解する暇も与えず，現実世界は非情にも扉を閉ざす。「どっちみち風は吹くんだ。どうってことないよ。」と呟くその声は，予期せぬ過酷な運命に翻弄されて抗うこともできぬまま生きることを放棄したかのように弱々しい。一体何故，このような窮地に追いつめられる羽目になったのであろうか。

Mama, just killed a man	ママ，人を殺しちゃった
Put a gun against his head	頭に銃を突きつけて
Pulled my trigger, now he's dead	引き金を引いたら　死んじゃったんだ
Mama, life had just begun	ママ，人生始まったばかりなのに

But now I've gone and thrown it all away　　僕，駄目にしてしまった

「人を殺しちゃった！」と犯行事実を母親に告げる悲痛な声。聴く者は思わず「誰を，何故殺してしまったの？」と尋ねたくなる。少年自身の身にも迫り来る死の影にいかなる謎が秘められているのであろうか。

『ボヘミアン・ラプソディ』は，1975年10月に発表されて以来，全英シングルチャートで9週連続第1位を誇り，2002年にギネス・ワールドレコード社によって行われたアンケートでは，英国史上最高のシングル曲として栄誉に輝いたと言われる。日本では2010年にNHK制作テレビ番組「BS 20周年ベストセレクション；世紀を刻んだ歌2　ボヘミアン・ラプソディ殺人事件」で改めて紹介され，2018年の秋，フレディの生涯が映画化されて再び世界を賑わし人々の熱い視線を集めた。NHKによれば，この曲がイギリス社会を揺るがすほどの大成功を収めた理由は，1960年代から続いたインフレによる慢性的な不況に1972年オイルショックが追い打ちをかけたことにあるという。電力供給の制限や灯油の配給制が実施されたばかりか，香港や台湾から安いナイフやフォークが輸入された結果，製鉄工場は閉鎖の憂き目に遭い多くのイギリス人が失業した。価値が崩壊し各地で爆弾やテロといった暴力行為が繰り返される深刻な社会にあって，人々は気力を失い不満を募らせていた。このような暗く疲弊した現実社会を忘れさせる革命的な活力源となったのが「ボヘミアン・ラプソディ」なるファンタジーだったというのだ。

曲に漂う哀愁が人々の心の琴線に触れ，ロックの強烈な旋律が救いの光を召き寄せ癒しをもたらしたと述べて成功に導いた原因を見出そうとするが，そもそもこの曲はファンタジーであろうか。冒頭の"Is this real life? Is this just fantasy?"（これは現実かしら？　それとも幻？）に'fantasy'という言葉はあるが，その原義たる「形式にとらわれず作者の自由な幻想によって作り上げられた曲」[(4)]に世界中の人々を夢中にさせるほどの威力が存在するとは思えない。感動をもたらし称賛を勝ち得たのは，曲に潜む真実が人々の共感を呼んだからに違いない。作曲者フレディに内容説明を求める母親に，彼は「ただのお話し。僕にも説明できない。」と答えたというが，彼の真意であったとは信じ難い。むしろ筆舌に尽くしがたい壮絶な思いが曲の背後に潜んでいると考えるべきであろう。

また同番組ではデビッド・クリリイ[(5)]なる人物が，文学的観点から成功の原因究明を試みる。先に触れた「これは現実か？幻か？」は存在への哲学的な問いかけであると考えて，ハムレットの独白「生か死か，それが問題だ」（To be, or not to be, that's the question.）[(6)]に重ね合わせるとともに，少年の台詞「どうってことないよ」（Nothing really matters）は，マクベスの台詞「人生は影に過ぎない。哀れな役者だ。」（Life is but a walking shadow, a poor player.）[(7)]を想起させると述べて，両作品の作者シェイクスピアとの関連性を指摘する。さらに「ハムレットもマクベスも〈無〉について語っている。シェイクスピアが英国文化を象徴する存在であるが故に，継承する現代の英国民はこの曲に漂う絶望感や無力感を理解しやすい。」と続けて，英国ならではの暗い歴史

を土壌に誕生した国民性が時代を越えて「ボヘミアン・ラプソディ」の背景に存在することが，英国民を魅了する原因であると論じる。真偽を明らかにするには，まずシェイクスピアがその眼で見たであろう当時の英国について概観する必要性がある。

Too late, my time has come	もう駄目だ，死が迫って来る
Sends shivers down my spine	震えが止まらない
Body's aching all the time	体が痛くてたまらない
Goodbye everybody-I've got to go	さようなら皆さん　もう行かなくては
Gotta leave you all behind and face the truth	お別れをしたら，真実に向きあうつもり
Mama, ooo—(anyway the wind blows)	ママ　あ～（でも風は吹く）
I don't want to die	死にたくないよ
I sometimes wish I'd never been born at all	生まれて来なけりゃよかった，って時々思うんだ

『ボヘミアン・ラプソディ』において少年は，殺人を犯した自分を卑下し自暴自棄に陥る。我が身にも迫り来る死の恐怖に戦慄し命乞いをする一方で，潔く覚悟を決めるよう促すのは，「死の扉を開き内奥に隠れる真実に対峙せねばならぬ」と訴える理性の声である。その毅然とした響きには，虚無感および絶望感といった負の感情に押し潰されまいと必死に抗う少年の強い意志が感じられないだろうか。ハムレットもマクベスも少年と同様ままならぬ運命に翻弄されて，生と死の狭間で奮闘した挙句死に身を委ねるが，息絶えるその瞬間，両者の心にはいかなる思いが去来したのであろうか。果たして『ハムレット』と『マクベス』そして『ボヘミアン・ラプソディ』も「無・絶望感・無力感」に終止する作品であると断言できるであろうか。

本論文は，両作品を生む基盤となったシェイクスピアの死生観を考察し『ボヘミアン・ラプソディ―』と比較検討することによって，曲の主題究明を試みる。

第１章　シェイクスピアの時代（1564～1616 年）── 魔術から科学へ

『ハムレット』が書かれたのは 1600 年，『マクベス』は 1605 年である。政権は 1558 年にチューダー朝最後の国王として即位したエリザベス（在位 1558～1603 年）の下にあった。父ヘンリー 8 世（在位 1509～47 年）によって宗教改革の一環として発布された「国王至上法」が「国王はイングランド国教会の最高首長（Supreme Head）である」と言表したため保守的なカトリック聖職者から反発を買った事実を踏まえて，1559 年に立法化された「国王至上法」はエリザベスを「最高の統治者」（Supreme Governor）に位置付けた。宗教色を払拭する配慮を示すことによって，父が創始したイングランド国教会を自らもプロテスタントとして再建しつつカトリックとの軋轢を避け中道路線を貫いたと言われる。[8] イングランド北部は，カトリックを信仰する昔からの貴族が力を振るっていたためエリザベスにとって脅威であった。プロテスタント貴族によって失政させられたスコットランドの君主メアリー・スチュアート（1542～1587 年）が彼らカトリック貴族

の支援を得てイングランドに亡命するが，イングランド王位継承権をエリザベスに要求したため幽閉されたばかりか，謀反画策の嫌疑をかけられて斬首されてしまう。メアリー亡き後スコットランドとの和平は取りあえず保たれる一方で，イングランド産毛織物の輸出先であったネーデルランドの利権をめぐるスペインとの対立は回避不可能であった。1588年，渡来したスペイン無敵艦隊を英仏海峡で迎え撃ち激しい海戦が繰り広げられた。結局イングランド勝利で決着するもののその後も幾度かスペインの攻撃を受けたためイングランドの国家財政が逼迫したという。財政的負担を強いられたにせよエリザベスは，スペインの攻略を見事にかわし強国イングランド国王としての権威を世界に誇示したことで，国民の士気を高め揺るぎなき政権を生涯握ることとなった。

このように外交・内政ともに政権争いには宗教が絡んでいるように思われるが，カトリックとプロテスタントの抗争は一般庶民にとってさほど問題にはならなかったようである。そもそもイングランにおける宗教改革はカトリック教徒であったヘンリー8世が妻キャサリンとの離婚を望みローマ法王に特許を求めたところ拒絶されたため代替え策として便宜的に考案されたものであった。妃に男子懐妊の兆がなく王位継承者の不在を懸念するあまりカトリック教徒としての信条を曲げてプロテスタントに改宗しローマカトリック教会と決別してイングランド国教会を創始せざるを得なかったヘンリー8世と庶民との間には甚だしい隔たりが存在したのである。

1348年，中国で発生した伝染病ペストがシルクロード経由で東ローマ帝国の首都コンスタンチノーブルにもたらされた後ヨーロッパ各地に拡散し，以来根絶されることなく断続的に猛威を振るい人々の恐怖心を煽ったと言われる。別名「黒死病」と呼ばれたように一旦発症すれば回復は望めない死の病であった。イングランドの人口は14世紀初めに400万人あったのが14世紀末には200万人まで急激に減少した。ようやく増加に転じたのは15世紀末で，一説によれば，1500年に260万人[9]あるいは1525年に220万人[10]と穏やかな上昇率を示したが，1603年までの間に急増加して400万人であった14世紀の原状を回復した。ロンドンの人口は1500年に5万人，1560年に10万人，1600年に20万人と増加傾向にあったが，1603年にペストが猛威を振るったせいで六分の一が死亡してしまった。チューダー朝における平均寿命は40歳以下であったという。[11]

労働力となる農民の多くが死んで収穫量が激減すれば，農地の所有者は高賃金を払っても労働力を確保しようとするため，農民の実質賃金が高まり生活水準は改善される。反対に人口が増加すれば，物価は上昇するため実質賃金が減り生活水準は低下すると言えよう。特にエリザベス朝末に至る100年間は物価が5倍に上昇し深刻なインフレに苦しんだ時代であったという。[12]労働力不足のせいで時間と手間がかかる農耕を諦めて牧畜に転業する者が多かったことも穀物不足を招くためインフレを加速したと考えられる。貧困に苦しむ者が地方から大都市ロンドンに職を求めて流入してきたため脅威を覚えた為政者が「貧民法」を1531年以降1550年に至るまで4度公布して就労可能者に労働するよう要請し従わない者には刑罰を科した。1601年には処罰ではな

く救済を目的とする「エリザベス貧民法」を掲げたが，教区民から救貧税を徴収して貧民に賦与するというものであったため，不評を買い適切な解決策には成り得なかった。しかし浮浪者が急増する反面，労働に従事する意欲のある失業者を受け入れることで商業と工業は活気を帯び急成長を遂げるという利点ももたらされた。さらに 1580 年代にエリザベスがオスマントルコと国交を結んだことから，従来の毛織物輸出ばかりではなく香辛料や絹，茶などの奢侈品の売買を手掛ける貿易会社レヴァント会社及び東インド会社などが設立されて世界を舞台に市場が拡大した。こうしてイングランドは農耕から牧畜に移行し，さらには商業活動が隆盛を極めた結果，世界各国を牽引する強力な貿易国への道を開いたと言えよう。

ヨーロッパ全域が 1560 年以降 1620 年頃に至るまで幾度か気候史上「小氷期」と呼ばれる異常現象に苛まれて穀物やブドウの木などが甚大な損害を被り飢饉に見舞われたこともペストと同様に社会不安を拡大する原因になった。科学に基づく知識や合理的な判断力の乏しい時代にあって，このような天変地異に対して人々が下した結論は，「魔女が有害な呪文（マレフィキウム）を人畜にかけて損害を与えている。」というもので，魔女根絶を目的に頻繁に魔女狩りを実施して火あぶりの刑に処す必然性に異論を唱える者は稀であった。しかし，このような天候魔術のみが魔女排斥現象の誘因になったわけではない。15〜16 世紀ヨーロッパで流行した占星術によって土星の守護神である悪魔サトウルヌスが劣等気質を意味する黒胆汁質と結びつき貧困者のような人間ばかりか魔女も悪魔の子供であると見做されたことから，キリスト教国において絶対的かつ超越的な存在である神を冒涜するものとして反逆罪に問われたという。[13] また，サバトなる悪魔主催の集会に参加するために箒にまたがって夜空を飛ぶ魔女の姿が多くの画家によって描かれたが，象徴学上「箒」が男性原理を表わすことから，魔女はエデンの園でアダムに禁断の実を食べるようそそのかしたイヴと同様に男性を性的に惑わす危険な存在であると見做されたことも魔女狩りを正当化する一因であったと考えられる。現代であれば風評被害とでも言うべきところであるが，1563 年エリザベス女王治世のイングランドでは，「魔術法令」なる法律が公布され魔術を用いて病や死をもたらすと恐れられた魔女に死罪を科すことが合法化されるほど，人々は魔女が実在すると確信していたのである。1603 年エリザベス死去の訃報とともにイングランド国王位招請を受けジェイムズ 1 世として即位したスコットランド国王ジェイムズ 6 世（1566〜1625 年）も，『悪魔学』（1597 年）[14] を著すほどの見識と信念に基づいて激しい魔女狩りを行った。両者ともに国王として新国家体制を確立する上で魔女を排除すべきであると考え奨励したことも，1560 年代の異常気象に並行して魔女狩りが始まり 1570 年から 1630 年に至る間に激化し続けた原因であった。しかしその後イングランドでは，1648 年に最後の魔女狩りが行なわれ 1682 年までに裁判と処刑も終了した結果，「魔術法令」は 1736 年に廃止された。スコットランドでも 1661 年に大規模な魔女狩りが行なわれたが 1727 年の処刑をもって終熄し，1707 年すでに両国が統一されて「大ブリテン王国」になっていたことから「魔術法令」も 1727 年に廃止された。[15]

魔女狩りを一掃し廃止に至らしめた最大の功績は，17 世紀にフランスに登場し「我思う。故に

我あり。」(コギト・エルゴ・スム)と考える懐疑的な存在論の立場から魔女の特定は不可能であると論じた哲学者デカルト(1596～1650年)や,「万有引力の法則」を発見したニュートン(1642～1727年)らの合理主義に基づく科学的思考がもたらしたと言えよう。魔女の嫌疑で捕えられた人間から拷問によって引き出された自白に信憑性などあり得ないというのだ。17世紀から18世紀にかけて,彼ら科学者は無知から生まれた不透明な闇に決別し魔女のみならず神の存在をも否定する人間理性の勝利を信じて大きく舵を切り,近代的な知の体系確立を目指して出帆したのである。

イギリスを初めヨーロッパでは教会の権威を誇示する「天動説」が2世紀ローマに登場したプトレマイオスによって考案されて以来盲信され続けて来たが,16世紀に至りその信憑性をコペルニクス(1473～1543年)が否定し「地動説」(1543年)を提唱することによって,教会は革新的な近代科学の洗礼を受け存続の危機に直面せざるを得なくなった。そこで,地動説の熱狂的な支持者に異端の罪を着せて処刑し見せしめにする必然性が生じたのである。犠牲者の一人ジョルダーノ・ブルーノ(1548～1600年)は,「唯一永遠かつ無限な存在は神ではなく宇宙である。」と主張したため1600年火刑に処せられた。また1609年ガリレオ(1564～1642年)が望遠鏡を発明して天体観測を行った結果,地動説の正当性が確証を得るとともに「太陽はガスの塊にすぎない」という驚くべき真実が判明したことから,古代ローマ人が太陽を神として崇いだミトラ教の廃止後キリスト教に継承された「聖なる義の太陽」というキリストのイメージも崩壊してしまう。天と地を統括する神ヤハウエが宇宙の中心に地球を創造し自身に似せて造った人間アダムに管理させたというユダヤ教及びキリスト教ともに認める創世神話が否定されると同時に,天と地すなわち神と人間の間に結ばれた関係にも亀裂が生じたばかりか,神の存在自体が疑問視され始めるのである。神は何処に。かつては霊的で超越的な支配者であることに疑いの余地もなかった神との絆を断たれれば,「人生は苦しみに満ちているが,神の教えに従って祈り悪行を悔い改めれば楽園なる天国の扉が開かれる。」というキリスト教が示した救済策も最早根拠を失い形骸化してしまう。信仰を根底から覆しかねない科学の出現に教会は猛反発し,弾圧する目的で1633年,ガリレオを被告人として召喚し宗教裁判にかけて有罪判決を下した。判決を聞いたガリレオが「聖書は天国への生き方を教えるもので天の仕組みを教えるものではない。真理の究明は数学を用いた科学だけができる。」と反論したと言われる。[16] 彼に続いてケプラー(1571～1630年)やニュートンら地動説を支持する多くの科学者を輩出した17世紀は,アメリカの科学者バター・フィールド(1900～1979年)が名付けた「科学革命」の幕開けであるとともに,教会にとっては外的脅威に曝される試練の始まりであったと言えよう。

キリスト教に危機をもたらしたのは何も科学だけではない。392年ローマ皇帝テオドシウス1世(346～395年)によってローマ国教に定められた後,中世という1000年間にわたるキリスト教の成長期にあって教会内部で聖職売買が盛んに行われた結果,腐敗が蔓延した事実を忘れてはならない。僧侶の間で清浄化運動が行なわれたとはいえ,聖職売買の数があまりにも多かったため

撲滅には至らなかった。教会同士の派閥争いや抗争分裂に発展するにつれて，神と人間との関係修復は絶望的に思われた。悪は，善なる神が誕生させた天使たちの一人サタンが神の座を欲するという傲慢の罪を犯した罰として地獄に落とされ悪魔の汚名を着せられた時に生じたと言われる。「創世記」によれば，悪魔の化身である蛇が人間アダムとイヴを唆して禁断の実を食させたことにより人間もまた自ら悪を犯す。さらに彼らの息子カインは弟アベルが神の寵愛を受けたことに嫉妬して殺してしまう。こうして人間を堕落させる悪は時代を経ても絶えることはなく，増殖を繰り返し誘惑の触手を広げる一方であった。1517 年「悪魔に洗脳されて罪深き存在に成り下がった人間を救済する」という大義のもとにローマ教皇レオ 10 世が免罪符を販売した事実は，キリスト教にさらなる堕落を招いたと考えられる。本来ならば罪を贖うためには懺悔や祈りが求められるところ，免罪符購入で肩代わりさせるという安易な解決方法を提示して一般大衆を扇動した結果，寄進する金額に応じて救済がもたらされるという誤解を正当化したばかりか，神の教えを記した聖書をないがしろにしてしまったのである。免罪符販売を行った本来の目的はサン・ピエトロ大聖堂を建築するための資金集めであったが，教会は神の代理として認められた権限を最大限に利用して教義をねじ曲げ人心を操作したと言えよう。教会の健全化を図る目的で，ドイツでは 1517 年，ヴィッテンベルク大学神学教授マルチン・ルター（1483～1546 年）が免罪符販売を批判するとともに聖書に立ち戻るべきであると主張して宗教改革に着手した。聖書原典を研究しその重要性を訴えるのはギリシア・ローマ古典文芸の復活を推奨するのと同様にルネッサンス運動の一環である。ルターは神と人間の本質を考える人文主義者として新たな時代への橋渡しを担ったのである。

人間が神を天に仰ぎ見て救いを求めた中世に対し，続くルネッサンス（14～16c）は人間復活と解されているように，人間自ら個性を自由奔放に開花させるとともにアダムとイヴによって断ち切られた神と人間との絆を取り戻し天地両世界の循環を願う新プラトン主義に支えられた時代である。思惟する神の「精神・理性」のみならず土から造られた人間の「肉体」に価値が見出された時代であるとも換言し得る。ボッチチェリ（1445～1510 年）の絵画「ヴィーナス誕生」（1485 年）で海の泡から誕生したばかりの裸体姿で描かれた女神アフロディーテが，「春」（1478 年）では衣服を身にまとい盲目の恋をもたらす息子エロスがつがえる矢の下にたたずむ。裸体は無垢を，着衣は世俗を象徴することから，二人のヴィーナスは「天上のヴィーナス」と「地上のヴィーナス」と称され，地上の愛が天上の愛に繋がるという彼の信念を表わしていると解釈される。[17] 歴史はキリスト教によって抑圧された暗い中世から解放されて希望の光輝くルネッサンスに塗り替えられたかのように思われた。しかしながらボッチチェリが描く生命の息吹溢れる画風は，ルターに先駆けて宗教改革に着手した僧侶サヴォナローラ（1452～1498 年）の影響を受け絶望感に打ちひしがれたものに変わってしまう。『誹謗』（1495 年）の画面左端にたたずむヴィーナスは，真実を語る者として右手を挙げて天を仰ぎ父なるギリシアの創造神ウラノスに救いを求めている。その表情は，前作 2 枚の絵から一変して硬くこわばり生気が失せて暗い。裁判所に引きずり

出された被告の青年は無実を訴えるが，虚偽を吹き込まれた裁判官の耳に真実は届かない。現世的な快楽と美を象徴する肉感的なヴィーナスは人間に堕落をもたらす悪の化身であるが故に排除して清らかな精神に基づく信仰に立ち戻るよう求めるサヴォナローラに従って，ボッチチェリは描いたヴィーナス像を焼き捨ててしまったと言われる。

「地上の愛は天には行けず地上に執着するしかない。神の国は遠い。」と空ろに響く彼の言葉は，「神の国」と「地の国」とを区別するアウグスティヌス（354～430年）の著書『神の国』[18] を想起させる。プラトンが「二世界説」を唱えて区別した「イデア」と「現象界」を基に，アウグスティヌスはイデアを神の理性に内在する観念と考えてイデアを神自身に置換したのである。同書はまた，2世紀ローマ人たちが抱いた問「我々は何か」という哲学的な命題に対して，「問に答えるのはローマの神々ではなく，キリスト教の神と教会である。」と答える。あらゆる存在を疑問視するデカルトは，「人間とは何か。」と考えた末に「我思う。ゆえに我あり。」と述べて，「考える自己すなわち精神」と「延長なる物体」という二つの実体から成る二元論を案出した。そして神によって造られ生命を与えられたと信じられている人間を内包する自然から生命力を奪い，謂わば機械のような死せる自然「無機的自然」という概念を生み出して，「絶対的な優位性を誇る神の理性・精神に対比して人間は卑賤な肉に過ぎない。」と論じた。また，ネッサンスを代表するミケランジェロ（1475～1564年）の彫刻「勝利の群像」[19] も，たくましい男性美を誇る青年カバリエリの立像を描く一方で彼の足元にうずくまる醜い老人を配置することによって，地よりも天すなわち神の理性・精神の優位性を訴えているという。

結局，ルネッサンスは神と人間の関係について人文主義的観点に基いて再考し人間の自由解放を訴えたものの，依然として神的理性の優位性に帰結せざるを得なかったと言えよう。このような歴史の変遷を考慮すれば，シェイクスピアの背景に存在したのは虚無感と絶望感に塗り潰された「無」の時代であったと言えるのかもしれない。とはいえ一旦芽生えた人間理性がキリスト教の傘の下にありながらも屈することはない。科学の支柱となる観察・実験による実証的な知識体系の確立を目指した結果，自然法則に左右されない環境を人為的に作り出す技術を獲得することに成功したと考えられる。続く18世紀は「啓蒙時代」と呼ばれるように，人間理性が神に代わって自然を操作し支配するほどに成長し，イギリスを拠点に産業革命をもたらすという成果を生んだ。もはや神の創造力は不要である。19世紀にはドイツ哲学者ニーチェ（1844～1900年）が「神は死んだ！」[20] と明言したように，神は終にその存在すらも否定されてしまう。やがてデカルト以来始まった自然の機械化および脱生命化が一挙に加速して，20世紀現代文明に至り人間までも精神偏重肉体蔑視という価値観に呪縛され生命力を失ってしまう。人間理性は，神を排除したばかりか今や自身の肉体をも放棄しようとしているのだ。イギリスの小説家D.H.ロレンス（1885～1930年）が「現代人は生ける屍（the living dead）である。」[21] と憂い批判の声を上げたが，科学信奉という新たな信仰を阻止することは不可能であろう。

以上の考察に基づき，シェイクスピアの時代（16～17世紀）は，ペストと飢饉が膨大な経済損

失を生じるに伴い悪魔や魔女という妄想が人心を惑わした時代であると言えよう。神による救済に望みを託しても，死と隣り合わせの恐怖に慄く現実から逃れることが不可能であれば，「絶望・虚無感」といった負の感情に脅かされたと推測するのは容易である。多大な犠牲を強いられた人々の苦悩は想像を絶するものと思われる。悲劇が連鎖する苛酷な歴史ではあるが 21 世紀現代から振り返ってみれば，無知蒙昧の闇を照らす人間理性の光によって魔術を払拭し科学の時代をもたらしたイギリス国民は必ずしも「無」に押し潰されて気概を失ってしまったわけではなく，価値転換を図り新たな時代を切り開こうと懸命に人生の荒波に立ち向かったと考えられるのではなかろうか。

第 2 章　『ハムレット』

城塞に立つデンマークの王子ハムレット。その眼前には甲冑に身を固めた亡き父王の口調で語りかける亡霊。「父王は弟クローディアスに毒殺された。然らば復讐して雪辱を晴らせ！」と厳命されて固く復讐を誓うものの優柔不断な性格のせいで躊躇してしまう。

> ...I say, the stamp of one defect, being Nature's livery or Fortune's star, his virtues else, be they as pure as grace, as infinite as man may undergo, shall in the general censure take corruption from that particular fault. The dram of evil doth all the noble substance often dout to his own scandal,　Act 1 Sc. 4[22]
>
> ……そうした連中は，自然の刻印が，運命の星の影響か，ある欠点を持って生まれたがゆえに，ほかにどんなに純粋な美徳，独りで背負いきれないほどの美徳を持っていようと，そのたった一つの欠点のために，世間の目には腐ったものと見えてしまう。ケシ粒ほどの泥がついただけで，どんなに立派な人物であろうとも，不名誉を被るのだ。
>
> The spirit that I have seen may be a devil, and the devil hath power t'assume a pleasing shape, yea, and perhaps, out of my weakness and my melancholy, as he is very potent with such spirits, abuses me to damn me.　Act 2 Sc. 2[23]
>
> 俺が見た亡霊は悪魔かもしれぬ。悪魔は相手の好む姿に身をやつして現れる。そうとも，ひょっとして俺が憂鬱になり，気弱になっているのにつけこんでまんまと俺をたぶらかし，地獄に追い落とそうという魂胆か。

ハムレットは，「優柔不断」という性格こそ自分の「欠点」であると自覚し，それが故にいつの日か「腐ったもの」と国民の罵声を浴びて悲劇を演じる羽目になりかねないといった危うさを予感している。腐敗感に凌辱されているのはハムレットばかりではない。夫の死を嘆く暇もなく貞淑を重んじる道徳心に従う理性もなく，クローディアスの求婚に応じた母に憤慨し失望するとともに，価値の転倒・秩序の崩壊がデンマーク王国全域に腐敗を蔓延させたと憂慮するが，逃れる術もないまま思い余って自殺を仄めかす。

O that this too too sullied flesh would melt, thaw and resolve itself into a dew, or that the Everlasting had not fix'd his canon 'gainst self-slaughter. O God! God! How weary, stale, flat, and unprofitable seem to me all the uses of this world! Fie on't, ah fie, 'tis an unweeded garden that grows to seed; things rank and gross in nature possess it merely. That it should come to this! Act 1 Sc. 2[24]

ああ，この固い，あまりに固い肉体が，溶けて崩れ，露と流れてくれぬものか。せめて永遠の神の掟が，自殺を禁じたもうことがなければ。ああ，神よ！神よ！　この世のありとあらゆるものが，この俺にはなんとうとましく，腐った，つまらぬ，くだらないものに見えることか！許せん，ああ，許せない。この世は，荒れ果てて雑草ばかり生い茂った庭。汚らわしいものだけがはびこって悪臭を放つ。こんなことになろうとは！

王国に充満する腐敗感は，かつて国を君臨した亡き父王にも及ぶ。「武勇の誉れ高く太陽の神のように立派な王だった。」と称賛するハムレットに反論するかのように，亡霊が「自分は神の裁きを待つ罪人である。」と述べて，王の実像を明らかにする。

I am thy father's spirit, doom'd for a certain term to walk the night, and for the day confin'd to fast in fires, till the foul crimes done in my days of nature are burnt and purg'd away. ... Thus was I, sleeping, by a brother's hand of life, of crown, of queen at once dispatch'd, cut off even in the blossoms of my sin, unhousel'd, disappointed, unanel'd, No reck'ning made, but sent to my account with all my imperfections on my head. O horrible! O horrible! Most horrible! If thou has nature in thee, bear it not, let not the royal bed of Denmark be a couch for luxury and damned incest. Act 1 Sc. 5[25]

我こそはそなたが父の霊魂，しばらくは夜ごとにさまようが　日ごと炎に焼かれて贖罪し，生前犯した罪の数々が焼き清められるのを待つ身。……こうしてわしは，眠りのうちに，弟の手によって命も，王冠も，妃も，一遍に奪われたのだ。終油の秘蹟も，懺悔の暇もなく，突然に俗世の罪咲き誇る中，命を断ち切られ，赦しも受けず，この身に罪を負ったまま神の裁きの庭に引き出されたのだ。ああ，むごい！むごい！なんという非道だ！そなたに人の情があるならば，これを許すな。デンマーク王室の臥所を，情欲と忌まわしき近親相姦で穢させてはならぬ。

今や亡き国王に代わって弟クローディアスが玉座に就こうとも，王国の惨状が改善されるわけではない。けたたましく鳴り響く太鼓とラッパの音。勢いを得て王が臣下と酒を飲み交わす祝宴を眼下に見下ろして「あれは何事でしょう。」と尋ねるホレイシオに，ハムレットが業を煮やしたように答える。

The King doth wake tonight and takes his rouse, keeps wassail, and the swagg'ring upspring reels; and as he drains his draughts of Rhenish down, the kettle-drum and trumpet thus bray out the triumph of his pledge. ... But to my mind, though I am native here and to the manner born, it is a custom more honour'd in the breach than the observance. This heavy-headed revel east and west makes us traduc'd and tax'd of other nations——they clepe us drunkards, and with swinish phrase soil our addition; and indeed it takes from our

achievements, though perform'd at height, the pith and marrow of our attribute. Act 1 Sc. 4[26]

国王が，夜を徹して祝宴を張り，飲めや歌えのどんちゃん騒ぎ，王がワインを飲み干すたびに，太鼓とラッパが天晴な飲みっぷりとばかりに，こんなふうに囃したてるのだ。……この国に生まれ，ああいう習わしに慣れ親しんでいる俺でさえ，あればかりはやめたほうが名誉だと思うのだが。こんな馬鹿げた乱痴気騒ぎをしているからヨーロッパ中で中傷，非難の的となるのだ。デンマーク人は酔っ払いだの，豚だのと言われて，評判はがた落ちだ。実際，どんなに力の限りを尽くし，緯業を成し遂げたところで評価してもらえない。

夜な夜な繰り広げられる酒宴。先王の時代より続く慣習に過ぎないとはいえ，父の死を嘆き悲しむハムレットには心情を逆なでする腐敗したカオスのように思われ嫌悪したのであろう。

クローディアスも，国王を殺害することで王位とハムレットの母親を一挙に我が物にするという野望を叶えたにもかかわらず，満足するどころか良心の呵責に苛まれる。人類最初の兄弟殺しとして聖書に登場する兄カインに自身を重ねたのであろう。「我が罪は天まで届くほどの悪臭を放っている」[27] と嘆くその言葉は腐敗感を露わにしている。神に懺悔をすれば罪は許されるというキリスト教会の教えに従ってイエスの磔刑像を祀る祭壇の前に跪くが，謝罪の気持ちを伴わない形式的な祈りの言葉など天には届かず神の赦しが得られるはずはないと考え直して断念する。そうとは知らずハムレットは，祈りを捧げている叔父の姿を目の当たりにして復讐を実行する絶好の機会到来とばかり剣を片手に勇み立つが，敬虔なクリスチャンらしく神に向き合っている者を背後から襲う卑劣さに気付き一瞬戸惑いまたもや躊躇してしまう。持って生まれた優柔不断な性格は変わりようのない欠点であるという彼の自覚を読者は再確認するであろう。

復讐を果たすための策略として，敵の眼を眩まし油断させる目的で狂気を装い恋人オフィーリアに向かって「尼寺へ行け」と声を荒げて叫ぶが，彼女はハムレットの真意を見抜けず失恋の痛手を負って嘆き悲しむ。しかし彼女の父親ポローニアスは，ハムレットの狂気が娘に振られたせいで生じたに違いないと思い込み，真偽をいぶかる王と王妃の前で実証を試みる。通りかかったハムレットが彼に呼びかけられて答えるその言葉は，狂人にふさわしからぬ軽妙な機知に富んでいる。

For if the sun breed maggots in a dead dog, being a good kissing carrion——Have you a daughter? ... Let her not walk i'th' sun. Conception is a blessing, but as your daughter may conceive——friend, look to't.
Act 2 Sc. 2[28]

というのも，日に当たれば死んだ犬にも蛆が湧く。腐れ肉にはくちづけが似合うゆえ —— おまえには娘があるか。…日向を歩かせぬがよい。知恵がつくのはよいが虫がついて妊娠すると困るだろう。

「死んだ犬」は，虫が付かぬよう大事に育てられた娘オフィーリアのみならずデンマーク全体を意味する。腐敗し疲弊した王国が，あたかも牢獄のごとき閉塞感をハムレットに押し付ける。

Denmark 's a prison. ... A goodly one, in which there are many confines, wards, and dungeons, Denmark being one o'th' worst ... Why, then 'tis none to you; for there is nothing either good or bad but thinking makes it so. To me it is a prison. ... A dream itself is but a shadow. (Hamlet)... Truly, and I hold ambition of so airy and light a quality that it is but a shadow's shadow. (Rosencrantz)... Then are our beggars bodies, and our monarchs and outstretched heroes the beggars' shadows. (Hamlet)　Act 2 Sc. 2[29]

デンマークは牢獄だ。……立派な牢獄だ。至る所に，独房だの，豚箱だの，地下牢だのがあるが，デンマークは最悪だ。……それでは，君たちにはそうではないのだ。そもそも，それ自体よいとか，悪いとかいうものはない。考え方一つだ。俺にとっては牢獄なのだ。……夢そのものが影にすぎない。（ハムレット）……まさしく野望というのははかなく空ろなもので影の影にすぎません。（ローゼンクランツ）となれば，乞食が実体で君主や野望に満ちた英雄たちは乞食の影にすぎないということだ。（ハムレット）

ハムレットによれば，牢獄に幽閉されているのは，野望に燃え実現を夢見て粉骨砕身努力した貴族や英雄たちであるが，彼らは所詮，飢えた乞食にすぎない。乞食なる実体が幾重もの影を増殖した結果生み出されたのがデンマーク王国なのだから，腐敗以外の何ものも存在し得ないのは当然であると言いたいのだ。。

亡き父王をギリシアの神々のごとく輝かしい存在と称賛する一方で，叔父クローディアス王には「悪の権化」「つぎはぎだらけの道化の王」と容赦なく批判の言葉を浴びせて愚弄する。ハムレットが振りかざす言葉の刃は母ガートルード王妃の耳にも突き刺さる。このようなクローディアスと再婚したのは娼婦に比肩しうる過ちであると母を責め立て，キリスト教徒としての理性的な判断を求めて詰め寄る。

That blurs the grace and blush of modesty, calls virtue hypocrite, takes off the rose from the fair forehead of an innocent love and sets a blister there, makes marriage vows as false as dicers' oaths——O, such a deed as from the body of contraction plucks the very soul, and sweet religion makes a rhapsody of words. Heaven's face does glow o'er this solidity and compound mass with tristful visage, as against the doom, is thought-sick at the act.　Act 3 Sc. 4[30]

母上のしたことは，慎みや恥じらいに泥を塗り，美徳を偽善と呼び，穢れなき愛の芳しき額から，愛の証の薔薇をもぎとり，代わりに娼婦の烙印を押すことです。結婚の誓いを，くだらぬ，いかさま博打の形(かた)に入れてしまうことだ。ああ，あなたがしたことは，契という肉体から魂を抜き取り，清い誓いの言葉をたわごとの羅列にすることだ。この固い塵の塊の所業に天も顔を赤らめよう。最後の審判を思って，悲痛な面持ちでうつむくだろう。

作者シェイクスピアは，ハムレットと共に亡霊の出現を目撃した重臣マーセラスに「何かが腐っているのだ，デンマークでは。」（Something is rotten in the state of Denmark. Act 1 Sc. 4）と呟かせることによって，「腐敗」を作品の主題として理解するよう読者を促しハムレットの眼を借りておぞましき実態を確認できるよう作品構成を仕組んだように思われる。では，クローディアスに

よる国王暗殺も腐敗現象の一つでハムレットが彼を殺せば父の雪辱を晴らし正義を回復させるばかりか王国の浄化をも可能にすると作者は主張しているのであろうか。そして「腐敗を排除することは，ハムレットが大義を感じいかに奮闘努力しようとも容易ではない。」というような結論に帰結するのであれば，作者は「無力感・絶望感」を作品の核に据えたことで，当時の厳格な階級社会で虐げられ苦渋に満ちた人生に甘んじざるを得なかった多くの貧しい庶民から共感を得ることに成功したと言えるのかもしれない。

Rest, rest, perturbed spirit. So, gentlemen, with all my love I do commend me to you; and what so poor a man as Hamlet is may do t'express his love and friending to you, God willing, shall not lack. Let us go in together, And still your fingers on your lips, I pray. Act 1 Sc. 5[31]

鎮まれ，鎮まれ，心乱れた亡霊よ。では，諸君，どうかくれぐれもよろしく頼む。このハムレット，今はこのとおり，無力な男だが，神の思し召しあらば，諸君の愛と友情にきっと答えよう。さあ，一緒に中へ入ろう。唇にはいつも指を立てておいてくれたまえ。この世の箍が外れてしまった。なんという因果だ，俺が生まれてきたのは，それを正すためだったのか。

復讐を実行するにはあまりにも力量不足な我が身を恥じらいつつ，外れてしまったこの世の箍を直し正義を貫くよう誓約を求める亡霊に応じて健気に立ち向かおうとするハムレットは，『ハムレット』（角川文庫）の訳者河合祥一郎氏が指摘するように，12 の功業を成し遂げたと言われるギリシアの神ヘラクレスに例えられよう。[32] そして，「それ（ハムレットのヘラクレス的試練）は自らを神の存在に近づけようとすることである。結局，人間の力を遙かに超える神の摂理に気付いた時点でこの努力は終わる。……どんなに頑張ってみたところで自然の摂理は変えられないと気付くようになっている。」[33] という河合氏の注釈は，人間を凌駕する聖なる神の絶対的な理性には対抗し得ず腐敗した王国に失われた秩序を回復する方法を編み出せぬまま途方に暮れるハムレットの卑小な姿を読者に想起させるが，実はさらなる深い解釈が可能である。

Hear you, sir, what is the reason that you use me thus? I lov'd you ever. But it is no matter. Let Hercules himself do what he may, the cat will mew, and dog will have his day. Act 5 Sc. 1[34]

なあ，君。どうして俺をこんな目に遭わすのだ？俺は君を愛していた。しかし，もうどうでもよいことだ。ヘラクレスがどんなに頑張ったところで，猫はニャーと鳴き，犬は得意げに吠えるものだ。

「神の摂理」が意味する神とは，キリスト教が森羅万象の創造主と認めるヤハウエあるいはイエスであり，ハムレットが憧れ自ら演じるヘラクレスは，ギリシア神話に登場する異教の神である。従って，ハムレットがヘラクレスを理想に仰ぎ血気にはやるものの途中で断念するのは，異教を制圧して不動の地位を確立したキリスト教の絶大な力には比肩し難い弱者であるという事実に気付き躊躇したためであるとも解釈できよう。

To be, or not to be, that is the question: whether 'tis nobler in the mind to suffer the slings and arrows of outrageous fortune, or to take arms against a sea of troubles and by opposing end them. To die――to sleep, no more; and by a sleep to say we end the heart-ache and the thousand natural shocks that flesh is heir to: 'tis a consummation devoutly to be wish'd. To die, to sleep; to sleep, perchance to dream――ay,there's the rub: for in that sleep of death what dreams may come, when we have shuffled off this mortal coil, must give us pause――there's the respect that makes calamity of so long life. For who would bear the whips and scorns of time, th'oppressor's wrong, the proud man's contumely, the pangs of dispriz'd love, the law's delay, the insolence of office, and the spurns that patient merit of th'un-worthy takes, when he himself might his quietus make with a bare bokin? Who would fardels bear, to grunt and sweat under a weary life, but that the dread of something after death, the undiscover'd country, from whose bourn no travellse returns, puzzles the will, and makes us rather bear those ills we have than fly to others that we know not of? Thus conscience does make cowards of us all, and thus the native hue of resolution is sicklied o'er with the pale cast of thought, and enterprises of great pitch and moment with this regard their currents turn awry and lose the name of action. Soft you now, the fair Ophelia! Nymph, in thy orisons be all my sins remember'd.　　Act 3 Sc. 1[35]

生きるべきか，死ぬべきか，それが問題だ。どちらが気高い心にふさわしいのか，非道な運命の矢弾をじっと耐え忍ぶか，それとも怒涛の苦難に斬りかかり，戦って相果てるか。死ぬことは―眠ること，それだけだ。眠りによって，心の痛みも，肉体が抱える数限りない苦しみも終わりを告げる。それこそ願ってもない最上の結末だ。死ぬ，眠る。眠る，おそらくは夢を見る―そう，そこでひっかかる。一体，死という眠りの中でどんな夢を見るのか―ようやく人生のしがらみを振り切ったというのに？　だから，ためらう―そして，苦しい人生をおめおめと生き延びてしまうのだ。さもなければ，誰が我慢するものか，世間の非難中傷，権力者の不正，高慢な輩の無礼，失恋の痛手，長引く裁判，役人の横柄，優れた人物が耐え忍ぶくだらぬやつらの言いたい放題，そんなものに耐えずとも，短刀の一突きで人生にけりをつけられるというのに？誰が不満を抱え，汗水垂らして，つらい人生という重荷に耐えるものか，死後の世界の恐怖さえなければ。行けば帰らぬ人となる黄泉の国―それを恐れて，意志はゆらぎ，想像もつかぬ苦しみに身を任せるよりは，今の苦しみに耐えるほうがましだと思ってしまう。こうして，物思う心は，我々をみな臆病にしてしまう。こうして，決意本来の色合いは，青ざめた思考の色に染まり，崇高で偉大なる企ても，色褪せて，流れがそれて，行動という名前を失うのだ。だが，待て。美しいオフィーリア！妖精よ，君の祈りにわが罪の赦しも加えてくれ。

また，復讐を誓いながら実行できない優柔不断な我が身に募る腐敗感を嫌悪して「いっそ死んでしまいたい。」と以前にも増して強烈で切実な自殺願望に囚われるが，いざとなると踏み切れない。自殺行為はキリスト教が禁じる悪に自ら手を染めることであるというキリスト教徒ならではの罪悪感を覚えたばかりか，死後の世界で必ずしも苦痛から解放されて安らぎを得るとは限らず，むしろ永遠の苦しみが待ち受けているかもしれないという妄想が恐怖を掻き立てたからである。

Does it not, think thee, stand me now upon――he that hath kill'd my king and whor'd my mother, popp'd in between th'election and my hopes, thrown out his angle for my proper life and with such coz'nage—is't not

perfect conscience to quit him with this arm? And is't not to be damn'd to let this canker of our nature come in further evil? Act 5 Sc. 2[36]

こうなったらやるしかない。あいつは，父を殺し，母を汚し，王位を掠め取って俺の希望を打ち砕き，この俺の命を狙って釣り糸を垂らし，ひどい策略をめぐらしやがった。あいつを，この手で始末するのは，まったくもって正しいことではないか？人間性を蝕む害毒を放置しておくのは，むしろ罪というものだろう。

ハムレットの殺意に気付いたクローディアスが，先手必勝とばかり刺客を差し向ける。危うくもその手を逃れたところでようやく敵意に目覚め復讐実行の機会を狙うその矢先，王クローディアスに仕える忠臣でありながら無実のポローニアスを間違えて刺殺してしまう。なおもハムレット殺害を画策する王に入れ知恵された息子レアティーズから決闘を挑まれるが，もはやハムレットに生と死の狭間で揺れ動く心の迷いも復讐を阻む罪悪感も微塵に存在しない。

Not a whit. We defy augury. There is special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come. The readiness is all. Since no man, of aught he leaves, knows aught, what is't to leave betimes? Let be. Act 5 Sc.2[37]

雀一羽おちるのにも神の摂理がある。無常の風はいずれ吹く。今吹くなら，あとでは吹かぬ。あとで吹かぬのなら，今吹く。今でなくとも，いずれは吹く。覚悟がすべてだ。生き残した人生など誰にもわからぬのだから，早めに消えたところでどういうことはない，なるようになればよい。

「生ある者死すべし」という神の摂理に従って，潔く死（it）を受け入れるハムレットの覚悟が表明されている。

Had I but time — as this fell sergeant, Death, is strict in his arrest—O, I could tell you—
but let it be. Horatio, I am dead, thou livest. Report me and my cause aright to the unsatisfied. ... O God, Horatio, what a wounded name, things standing thus unknown, shall I leave behind me. If thou didst ever hold me in thy heart, absent thee from felicity awhile, and in this harsh world draw thy breath in pain to tell my story... O, I die, Horatio. The potent poison quite o'ercrows my spirit. I cannot live to hear the news from England, but I do prophesy th'election lights on Fortinbras. He has my dying voice. So tell him, with th'occurrents more and less which have solicited — the rest is silence. *Dies.* Act 5 Sc. 2[38]

時間さえあれば —— もはや黄泉の使いに捉えられ，逃れられぬ —— 話しておくこともあるのだが —— なるようになれ。ホレイシオ，俺は死ぬ，　おまえは生きて，俺のしたこと，そしてその大義を何も知らぬ人に伝えてくれ。……なあ，ホレイシオ，このまま真実が知られずにいたら，俺の名前はどんなに傷つくと思う？俺を少しでも大切に思ってくれるなら，しばらくは神のもとへ行く幸福を諦めて，このひどい世界で，苦しい息をつきながら，俺のことを語り伝えてくれ。……ああ，もう死ぬぞ，ホレイシオ。強い毒が，すっかり気力を抑え込んだ。生きてイングランドからの知らせを聞くことはできないが，次に選ばれるのはフォーティンブラス。彼を選ぶのが俺の遺志だ。だから，彼に伝えてくれ，これまでに起った事の顛末を。

―― あとは沈黙。あああああ。〔死ぬ〕

ハムレットは，レアティーズとの決闘で毒が塗られた刃の一撃を食らい絶命する寸前，腹心の家来ホレイシオに向かって，自分が死に至った真相を世に知らしめるよう命じる。傷ついた体に毒が浸潤し意識朦朧となりながらも今わの際に，父との誓いを自身の死を代償にしても成し遂げた勲功が後世の人々に認められ名誉が守られるであろうことに希望を託し，もはや悔いなき人生を満願の思いで閉じようとしていると解釈できよう。

従って，この作品が掲げる主題は，「善・悪二元論に立脚して天に神の超絶的な霊・精神を仰ぎ，地上世界を人間の汚辱にまみれ腐敗した肉体と見做すキリスト教の価値観に支配され，抗えば死を余儀なくされた時代にあれば当然のことながら，微力な人間誰しもが無力感や絶望感の虜になりがちである。」といった単純なものではないと考えるべきである。ハムレットが人々に伝えるようホレイシオに託した「真実」(things standing thus unknown) とは，ハムレットが復讐を達成した経緯を意味するのは本人の説明によって明白であるが，さらに死を受容することによって初めて開示される真の主題が存在することをも暗示しているのではあるまいか。

彼が身に着けている黒衣。それは亡き父を偲ぶ喪服である。しかし葬儀を終えても脱ごうとせず塞ぎ込んでいる息子を案じる母が「いつまでも目を伏せて，気高い父上を土の中まで求めてはなりません。生きとし生けるものは必ず死ぬ。」と諌める言葉に答えるハムレットの台詞が，黒衣に秘められたさらなる真実を仄めかす。

> 'Tis not alone my inky cloak, good mother, nor customary suits of solemn black, nor windy suspiration of forc'd breath, no, nor the fruitful river in the eye, nor the dejected haviour of the visage, together with all forms, moods, shapes of grief, that can denote me truly. These indeed seem, for they are actions that a man might play; but I have that within which passes show, these but the trappings and the suits of woe.
>
> Act 1 Sc. 2[39]

この黒いマントだけではないのです。母上。しきたりどおりの重々しい喪服も，胸をしぼる溜め息も，そう，川のように溢れる涙も，愁いに沈んだ面持ちも，悲しみのどんな見かけも，様子も，しぐさも，私の心を真実表わしはしないのです。そうしたことは確かに「見える」こと，演じてみせることさえできる。しかし，この胸のうちには，見せかけを超えたものがある ―― こんな外面は，悲しみの飾り，お仕着せでしかありません。

黒衣は彼にとって父を失った悲しみを覆い隠すみせかけにすぎないという。しかし錬金術思想に基づいて解釈するならば，「黒衣」はハムレットおよびデンマーク全体に及んだ腐敗を象徴し腐敗は死後生じることから，ジャン・パリスがその著書『ハムレット―構造的分析的試論―』[40] で述べる「偽りに満ちた現実世界とは別の見えざる世界・秘密の心奥の国・死者の国」を暗示している可能性も認められよう。「黄金を得るには精神も肉体も堕落して腐敗しなければならない。悪

は善の条件で，善悪の両方を引き受ける者は偉大な英雄である。」[41]，と述べていることから，明らかに彼も錬金術的解釈を試みようとしていると考えられる。

錬金術思想を表す象徴の一つに，「ウロボロスの蛇」という円環状に丸まって自分の尾を咬む一匹の蛇が存在する。黒い上半身が男性原理を，白い下半身が女性原理を司る，両性具有的な存在である。すなわち，キリスト教が善なる神（男性原理）に至高の価値を置き，悪（女性原理）を悪魔に体現させて蔑視する二元論に立脚しているのに対し，錬金術は二元を調和させることによって人間が永遠無限なる異教的神性を得られると考えるのである。しかし調和は初めから存在しているわけではない。第一質料と称される鉛（カオス）を体現する蛇の体内で結合している両原理が分離して戦い死を経た後に再結合した暁にようやく実現すると言われる。つまり，調和の証となる黄金・賢者の石を得るためには，カオスの闇に没入して死を体験しなければならないのだ。しかも，誕生から死・再生に至る過程は，「一は全なり。全は一なり。」という錬金術の奥義に従って永遠に繰り返される。円環に始めも終りもないばかりか，蛇は生涯幾度も脱皮するという事実に基いて「ウロボロスの蛇」が錬金術の永遠性を表す象徴として描かれる。

作者シェイクスピアは自身の錬金術的な死生観をハムレットに代弁させているように思われる。彼の台詞 “To be or not to be, that’s the question.” はいかに訳されるべきであろうか。前述の河合氏が収集した 40 に及ぶ訳例[42] のほとんどが，表現は微妙に異なるものの生か死かと惑う心の葛藤を表わしている。河合氏自身も，広く人口に膾炙している解釈の妥当性を認めて，「生きるべきか，死ぬべきか，それが問題だ。」と訳す。このような日本の翻訳状況を鑑みるならば，イギリス人小説家 D.H. ロレンスが小説『イタリアの薄明』[43] で語るハムレット解釈は，常識を覆す異色の存在である。

> The question, to be or not to be, which Hamlet puts himself, does not mean, to live or not to live. It is not the simple human being who puts himself the question, it is the supreme I, King and Father, in the Self supreme? To be or not to be King, Father in the Self supreme? And the decision is, not to be.[44]
>
> ハムレットが自分に課する「あるか，あらぬか」という質疑は，「生きていくか，生きていかないか」という意味ではない。自分にその質疑を課しているのは単純な人物ではないのであって，それは至高の「私」，すなわち「王」であり「父親」である。問題は「王」であり，「父親」であり，至高なる「自己」であるか，それともあらぬか，である。そして採決は「あらぬ」である。[45]

すなわちロレンスによれば，“To be or not to be” は「生か死か」の選択を迫るのではなく「至高なる自己」に成り得ているか否かを問う言葉であり，この観点に基づけばハムレットは「至高なる自己ならざる存在」であるという。そもそも「自己」とは何を意味するのであろうか。

> Hamlet suffered the extremity of physical self-loathing, loathing of his own flesh. The play is the statement of the most significant philosophic position of the Renaissance. Hamlet is far more even than Orestes, his

prototype, a mental creature, anti-physical, anti-sensual. The whole drama is the tragedy of the convulsed reaction of the mind from the flesh, of the spirit from the self, the reaction from the great aristocratic to the great democratic principle.(46)

ハムレットは肉体的な自己嫌悪，自分自身の肉に対する嫌悪の極限に悩んでいる。この芝居はルネサンスのもっとも重要な哲学的立場を述べたものにほかならない。ハムレットはその原型であるオレステスよりもはるかに精神的な人間であり，反肉体的，反官能的である。この劇はその全体を通じて，肉から頭脳が，自己から精神が，痙攣して反発する悲劇であり，大いなる貴族主義的原理から反発して大いなる民主的原理に向かう悲劇である。

つまり「自己」とは換言すれば生ける肉体であり，自己を所有する者は，他者に束縛されることのない自由な存在という意味で王や貴族的な人間であるというのだ。古代人はこの異教的な考えを信奉すれば人間も神のような不滅で無限の存在になれると信じていたが，中世からルネッサンス期に至りキリスト教が一旦は権威喪失の憂き目にあうものの，ルターやサヴォナローラによる宗教改革を経て支配力を回復するに伴い，異教的王国の存在は忘れ去られてしまった。そこにシェイクスピアが登場しハムレットに，国家全体に拡散した腐敗が彼自身を蝕んでいると嘆かせ，父王を筆頭に多くの登場人物をそしてハムレット自身をも死に追いやってしまう。ルネッサンスは精神偏重肉体蔑視というキリスト教的価値観に基づき精神的で理性的な人間像が憧憬の的となった時代であり，ハムレットはその理想像を我がものにしようと精神化を図るあまり，肉体に崇高な自己が宿ると信じる異教的な道を拒否して自虐的な決断を下したというのである。ハムレットに限らず多くの人々が，「汝の隣人を愛せ」というキリスト教の教義に従って自己を排除し非自己となって隣人なる他者に溶解するにつれて，社会は個よりも全体の福祉を重んじる民主主義国家を形成し始めたとも考える。

彼の解釈に従うならば，‘to be’ は「自己として生命力に満ちた真の肉体を得ること」を，そして ‘not to be’ は「形骸化した精神の虜になること」を意味する。従ってハムレットが「生か死か」と散々迷った挙句，「固い肉体が解けて崩れ露と流れてくれぬものか」(O that this too too sullied flesh would melt, thaw and resolve itself into a dew) と穢れた肉体を嫌悪して「死」‘not to be’ を選択しようとするのは，敬虔なるキリスト教徒として肉体よりも精神に優位性を見出したことになる。このような理論は，下記の独白がハムレットの精神性を明示していることから支持しうる。

What is a man if his chief good and market of his time be but to sleep and feed? A beast, no more. Sure he that made us with such large discourse, looking before and after, gave us not that capability and godlike reason to fust in us unus'd. Now whether it be bestial oblivion, or some craven scruple of thinking too precisely on th'event——a thought which, quarter'd , hath but one part wisdom and ever three parts coward——I do not know why yet I live to say this thing's to do, ... O, from this time forth my thoughts be bloody or be nothing worth.　Act 4 Sc. 4(47)

人間とは何だ？ただ食って寝るだけで人生のほとんどを費やすとしたら？獣と変わりはない。神は我らに前を見通し後ろを見返す大きな思考力を授けたもうた。その能力と神にも劣らぬ理性を持ち腐れにしてよいはずがない。ところが俺は，畜生の物忘れか，あるいはあれこれと結果を考えすぎて臆病風に吹かれたか —— 考えなどというものは4分の1は知恵かもしれぬが，4分の3は臆病にすぎぬ —— 何だって俺は，これだけはやらねばならぬと言いながら，おめおめと生きているのだ。……ああこれからは俺の心よ，血に飢えろ。さもなければ男ではない。

さらに「決意本来の色合いは青ざめた思考の色に染まり，崇高で偉大なる企ても色あせて流れがそれて，行動という名前を失うのだ。」と述べるに至り，ハムレットの選択が「行動する肉体」を退け「思考する精神」に帰着している事実によって，既述のロレンス流解釈は確証を得る。

Who would fardels bear, to grunt and sweat under a weary life, but that the dread of something after death, the undiscover'd country, from whose bourn no traveler returns, puzzles the will, and makes us rather bear those ills we have than fly to others that we know not of? Thus conscience does make cowards of us all, and thus the native hue of resolution is sicklied o'er with the pale cast of thought, and enterprises of great pitch and moment with this regard their currents turn awry and lose the name of action. Act 3 Sc. 1[48]

誰が不満を抱え汗水垂らしてつらい人生という重荷に耐えるものか，死後の世界の恐怖さえなければ。行けば帰らぬ人となる黄泉の国 —— それを恐れて意志はゆらぎ想像もつかぬ苦しみに身を任せるよりは今の苦しみに耐えるほうがましだと思ってしまう。こうして決意本来の色合いは青ざめた思考の色に染まり，崇高で偉大なる企ても色あせて流れがそれて，行動という名前を失うのだ。

すなわちロレンスは，「生か死か」を「自己か非自己か」に，さらには「肉体か精神か」に換言し，ハムレットに向かって「自己が宿る崇高な肉体を排除してしまった」と批判しているのである。ロレンスが肉体消失を嘆くのは，異教的世界に憧憬の念を抱いているからに他ならない。一方肉体を有せず思惟する存在すなわち精神・理性・霊として聖書に登場する神ヤハウエを天に仰ぐキリスト教徒は，地上にあって神と同様に自身の肉体を排除すべきであると信じている。神が嫌う腐った肉体。そこで信者は肉体から解放されて天国に迎えられたいがために神に祈り赦しを乞う。ハムレットもキリスト教徒として肉体を嫌悪するものの一方で自殺を禁じる教えに従わざるを得ないが故に苦悩するのである。

このような神が頂点に立つ大宇宙と地上の人間世界すなわち小宇宙との主従関係が健在した中世までは神の代理を担う教会によって社会秩序が保たれていたが，その支柱になったのは，ロレンスが述べるように精神偏重肉体蔑視の二元論的思想であったと言えよう。

しかし続く16世紀ルネッサンス期から17世紀にかけて，コペルニクスやガリレオなどの科学者によって地動説が唱えられ2世紀の昔から信じられてきた天動説が否定された結果，社会秩序にひび割れが生じ革新的な時代が幕を開けた。神が創造したはずの大宇宙。その中心に地球が存

在し惑星に取り巻かれているという宇宙構造はキリスト教が自らの都合で編み出した幻にすぎず，科学的根拠は何もない。「人間復活」と「人文主義」を推し進めたルネッサンス。精神と肉体のいずれをも尊重する新プラトン主義に基づきボッチチェリをはじめ多くの画家が人間の裸体に自然の美を見出し古代ギリシアの神々の姿を絵や彫刻に再現する一方で，科学を誕生させた人間の理性も重視され始めた時代にあって，神のみが唯一の霊的精神的な存在であり続けることは不可能であったと考えるべきであろう。第1章で述べたように，当時キリスト教会では聖職者間の聖職売買や免罪符の販売があまりにも横行し腐敗していたため宗教改革を試みたものの一掃するには至らなかったことにより，その後キリスト教がかつての栄光を取り戻すことはもはやあり得なかった。

このようなキリスト教から人間中心主義への変遷は，プラトンが礎を築いた形而上学世界内における出来事であった。彼が主張するイデア論において，肉体は「質料および事実存在」，精神は「イデアなる形相および本質存在」という名称で言表される。質料は素材（マテリアル）であるが，形相によって形づけられ命が吹き込まれるまではそれ自体に生命力はないため自立できない。キリスト教が本能的欲望に凌辱されて穢れることを嫌う肉体，そしてハムレットが嫌悪し溶けてしまえばよいと願う「固い肉体」（sullied flesh）とは，形而上学における質料・素材でありデカルト由来の生命力を欠いた「無機的自然」と称されるものである。『旧約聖書』の「創世記」に登場するアダムの名は，「土」を意味するヘブライ語「アダマー」に由来すると言われる。アダムが生産力のない土という卑しい素材から生まれやがて寿命を終えて土に還る定めであったように，ハムレットも人間であるからには神の摂理に従って死ぬのは当然であるとキリスト教徒ならば理解するだろう。「人間の肉体は死して腐れどもその精神は魂となって霊なる神の身元に昇り救われる」，と彼らは信じ死後の救済に希望の光を見い出していたのだから。

衰退するキリスト教とともに形而上学世界に実在する王もまた死すべき運命であった。1642年，イギリスで王と議会が対立して内戦が始まり民衆運動に発展すると，当時イギリスの軍人であったオリバー・クロムウエル（1599～1658年）が議会軍を率いて王軍を制圧し，1649年，王権神授説を主張したチャールズ一世（1600～1649年）を処刑して共和制をしいた。このような歴史上の変遷を知るロレンスは，キリスト教も貴族主義も庶民の間に広まる民主主義にその座を譲渡せざるを得なかったと考える。

> The King, the Emperor is killed in the soul of man, the old order of life is over, the old tree is dead at the root. So said Shakespeare. It was finally enacted in Cromwell. Charles I, took up the old position of kingship by divine right. Like Hamlet's father, he was blameless otherwise. But as representative of the old form of life, which mankind now hated with frenzy, he must be cut down, removed. It was a symbolic act.[49]
>
> 「王」「皇帝」は人間の心のなかで殺され，古い生活秩序は終わり，古木は根が枯れている。そのようにシェイクスピアは言ったのだが，それが実際に上演の日を迎えたのはクロムウェルにおいてであった。

チャールズ一世は王権神授という古の立場を採り上げた。ハムレットの父親のように，彼も他の点では別に非難すべきところはなかったのである。しかし，人類がいまや逆上せんばかりに憎んでいる古い生活形式の代表として，彼は切り倒され，削除されねばならない。それは象徴的な一幕であった。

ロレンスが讃美する自己なる生命力を帯びて輝く肉体は，哲学上「有機的自然」に換言される。形而上学世界で腐敗したハムレットおよびキリスト教徒の肉体「無機的自然」とは異なることに注目したい。「異教的肉体および無限性」は，チャールズ一世が実在した形而上学世界には存在しない。ロレンスの自伝的作品と考えられる『息子と恋人』の主人公ポールがロレンスに代わって説明する。

Another day she sat at sunset whilst he was painting some pine-trees which caught the red glare from the west. He had been quiet. “There you are!” he said suddenly. “I wanted that. Now look at them and tell me, are they pine trunks or are they red coals, standing up pieces of fire in that darkness. There’s God’s burning bush, for you, that burned not away”(50)

ある日の夕方ミリアムは，夕暮れの赤い光線を浴びている松の木を写生しているポールの傍らに座っていた。彼は静かに描いていた。「ここにいたの！」と，彼は突然言った。「君がいてくれたらいいと思っていたんだ。あの暗がりに炎のように突っ立っているものは，松の木に見える？　それとも赤い石炭に見える？　良く見て教えてくれないか，燃えてもなくならない，神様の燃える藪があれじゃないかな？」

ポールが森で夕暮れ時の赤い光線を浴びて炎のように燃え上がっている松の木を写生している場面である。松の木と知りながら，敢えて「松の木に見える？それとも赤い石炭にみえる？」と恋人ミリアムに尋ねる。続く彼の言葉「燃えてもなくならない，神様の燃える藪があれじゃないかな？」は，ロレンスにとって松の木も石炭も目に見える形状は異なっても自然界に存在する素材という意味においては同質であり，今二人のいる場所が異教の神に守られ生命力の炎を上げて永遠に燃え続ける無限の領域であることを明言している。「森」を意味する Wood の語源は Hyle（ギリシア語）で，「森」の他に「材木」「材料」「素材」をも意味する。つまり古代ギリシア人にとって森は，森羅万象を創出する生命力が満ち溢れ躍動する源泉だったのだ。それはまた，未分化で両性具有的な第一質料として固有の形を持たず混沌とした原初の有機的自然世界，すなわち，ピタゴラスのモナド論(51) において光というモナド（単子）が原初の物質として誕生する以前の闇に閉ざされた非物質の世界「カオス」であった。ポールが描く絵に松の木でありながらその形は表現されず，輪郭を持たない光彩のみが広がっているのは，現実世界の背後で暗い生命の輝きを放つ古代異教の「隠れたる神」(52) を彼が幻視しているからであると解釈される。形は形而上学において形相あるいは本質存在と称され，質料あるいは事実存在に生命力を与えるものとして重視されたが，ポールが見つめる異界すなわちフュシスという有機的自然界では存在価値を持たない。

"Why do I like this so?" ... "It's because —— it's because there is scarcely any shadow in it —— it's more shimmery —— as if I'd painted the shimmering protoplasm in the leaves and everywhere, and not the stiffness of the shape. That seems dead to me. Only this shimmeriness is the real living. The shape is a dead crust. The shimmer is inside, really."(53)

「私はこの絵がどうしてこんなに好きなのかしら？」(ミリアム)

「それは —— それはこの絵には暗い影が少しもないからじゃないかな。まるで，ぼくが木の葉や，あたりのきらきら光る者ばかり描いて，形の硬さを少しも描かなかったかのように，この絵はきらきうら光っているんだ。僕には硬い形というのは死んでいるように見える。ただこの明るい輝きだけがほんとうの生命なんだ。形は死んだ抜けがらなんだ。輝きだけがほんとうの内容なんだ。」(ポール)

このようなロレンスの異教的思想は友人アーネスト・コリングズに宛てて書いた手紙（1913 年 1 月 17 日）にも顕著である。「僕の偉大なる宗教は，知力よりも懸命なものとして，血を，そして肉を信じることなのだ。」(My great religion is a belief in the blood, the flesh, as being wiser than the intellect.)(54) から続く文面には，形而上学世界を構築する精神（形相）ではなく異教世界の土壌を成した肉体（質料）の優位性が執拗に主張されている。男性の肉体を蝋燭に例え，燃え上がる炎が永遠の生命力を増殖し続けていると称賛し，蝋燭の周囲に映し出された影を精神の一時的ではかない反映と見做して侮蔑する。かつてプラトンが登場する以前は，自然世界（フュシス）が本もので文明世界（ノモス）は仮象にすぎないという世界観を多くのギリシア人が共有していたと言われる。プラトンによって文明と自然の優劣が逆転し，実在すると信じられていた自然世界は仮象の存在に転落し抹消されてしまったのである。こうして確立された形而上学的文明世界にロレンスは憤り原初の自然世界を奪還するよう声を荒げて訴える。誰であれ蝋燭の炎に成り得たならば，異教の神に向かって誇らしげに「私は私自身だ！」(My God, I am myself!) と豪語すべきであるという。この「私自身」(myself) は，『イタリアの薄明』で渇望された「自己」(self) に合致するが，獲得できるのは無意識的で本能的な欲望に従って人生を謳歌する陽気なイタリア人であるという。一方イギリス人には，ハムレットと同様に自己を忘却し精神主義に陥っていると容赦なく叱声を浴びせる。「肉体か精神か，それが問題だ。」ハムレットを悩ましたこの問いは，今や全イギリス人に投げかけられているという。文明世界に浴す彼らが選ぶのは科学をもたらした合理主義的な精神であるが，同時に，喪失した有機的自然の片鱗を求めて人間主義といった偽善的で無意味な思想活動に精を出すことになるというのだ。「人間とは何か，何のために生きるのか。」という哲学的命題に，ロレンスは同書簡で「肉体が感じる本能的な欲望に従って行動する。それが生きることの真意である。」と答える。イギリスが 1760 年以降世界に先駆けて産業革命の推進役を担い機械文明国家を構築するとともに資本主義経済を確立し得たのはイギリス人の思考力が生み出した成果であるが，同時に文明の発展は自然破壊という代償の支払いを人類に課した。このような事実を想起するならば，彼の結論は受容せざるを得ないのかもしれない。

My great religion is a belief in the blood, the flesh, as being wiser than the intellect. We can go wrong in our minds. But what our blood feels and believes and says, is always true. The intellect is only a bit and a bridle. What do I care about knowledge. All I want is to answer to my blood, direct, without fribbling, intervention of mind, or moral, or what-not. I conceive a man's body as a kind of flame, like a candle flame, forever upright and yet flowing; and the intellect is just the light that is shed on to the things around. And I am not so much concerned with the things around - which is really mind - but with the mystery of the flame forever flowing, coming God knows how from out of practically nowhere, and being *itself*, whatever there is around it, that it lights up. We have got so ridiculously mindful, that we never know that we ourselves are anything - we think there are only the object we shine upon. And there the poor flame goes on burning ignored, to produce this light. And instead o chasing the mystery in the fugitive, half-lighted things outside us, we ought to look at ourselves and say 'My God, I am myself!' That is why I like to live in Italy . The people are so unconscious. They only feel and want: they don't know. We know too much. No, we only *think* we know such a lot. A flame isn't a flame because it lights up two, or twenty objects on a table. It's a flame because it is itself. And we have forgotten ourselves. We are Hamlet without the Prince of Denmark. We cannot *be*. "To be or not to be" - it is the question with us now, by Jove. And nearly every Englishman says 'Not to be.' So he goes in for Humanitarianism and suchlike forms of not-being. The real way of living is to answer to one's wants. Not 'I want to light up with my intelligence as many things as possible' but 'For the living of my full flame - I want that liberty, I want that woman, I want that pound of peaches, I want to go to sleep, I want to go to the pub and have a good time, I want to look a beastly swell today, I wants to kiss that girl, I want to insult that man.' Instead of that, all these wants, which are there whether-or-not, are utterly ignored, and we talk about some sort of ideas. I'm like Carlyle, who, they say, wrote 50 volumes on the value of silence.

Send me some more drawings, if ever you have any quite to spare. I liked your photograph but it wasn't very much of a revelation of you. I like immensely to hear about your art. Write me when you feel you can write a lot.(55)

僕の偉大なる宗教は知力よりも賢明なものとして血を，そして肉を信じることなのだ。我々は頭脳では間違いを犯すことができる。ところが我々の血が感じ，信じ，言うことは常に真実なのだ。知力とはほんのくつわや手綱にすぎないのだ。僕が知識というものに何の関心があろうか。僕の欲するすべては精神とか道徳などのくだらない干渉なしに，直接，僕の血液の要求に答えることだ。僕は男性の肉体は，ちょうど蝋燭の焔のように，常にまっすぐ立っているがしかも常に燃え上がっている一種の焔と見做す。そして知力は周りの事物の上に投げられた光にすぎないのだ。そして僕は周りの事実には対して関心がない。―それは本当は精神なのだから―そしてかえって，どういうふうにしてかは神のみぞ知るだが，実際にどこからともなくやって来て，それが照らし出す，その周りのものがどんなものであれそれにはかまわずそれ自身であるところの，永久に燃え上がる焔の神秘さにしか関心がないのだ。我々はあまりにも滑稽に精神化しているので，我々が何者であるかをけっして知らない―そして我々の照らし出す事物しか存在しないものと考えるのだ。そしてかわいそうな焔は，この光を作り出すために，人に知られず燃え続ける。我々の周りの一時的な，なかば照らされた事物の真理を追究する代わりに，我々は我々自身を眺めて「神よ，私は私自身だ！」と言わねばならない。それこそ僕がイタリーに住むのが好きな理由だ。人々はそれほど無意識的だ。彼らは感じ欲するだけだ。彼らは知りはしないのだ。我々はあまりに多くを知りすぎている。い

や，我々はたくさん知っていると思うだけだ。焔は食卓の上の2個あるいは20個の物体を照らすからといって焔ではないのだ。焔は，それ自身であって他の何ものでもないからして焔なのだ。我々は我々自身を忘却している。我々はデンマークの王子でないハムレットなのだ。我々は存在しないのだ。「生きながらえんか，死すべきか」――神よ，それは今や我々の問題となった。そしてたいてのイギリス人が「死すべきだ」と言っている。そこで彼は人道主義だとか，そんなふうな非存在の形式に走るのだ。「自分の知力の光でできるだけ多くのものを照らし出したい」ではなくして，「私の生命の焔を充分生かし切るために―私は自由を欲する，あの女を欲する，あの一ポンドの桃がほしい，私は眠りたい，居酒屋にいって楽しみたい，今日はとてつもない洒落男の様子をしてみたいとか，あの娘にキスしたいとか，あの男を侮辱してやりたい」でなければならない。ところがその反対で，いやでも応でもそこに存在すべきこれらすべての欲求の代わりに，我々はある種の思想のことを話す。僕はちょうど，沈黙の価値について50巻の書物を書いたと言われるカーライルみたいだね。

不要の分があったらもっと絵を送ってくれたまえ。君の写真，気に入ったが，あまり君の本質を表わしてはいないようだ。君の芸術について，非常にききたく思っている。うんと書きたいときに手紙をくれたまえ。(56)

同書簡でロレンスは，沈黙の価値を述べるのに50巻もの書物を書いたと言われるカーライルに自分を重ねる。それは，沈黙の必然性を説くならば自ら黙るべきところ膨大な言葉を書き連ねるという矛盾をカーライルが犯したように，ロレンス自らも沈黙を蝋燭の炎（肉体）に置換して奪還すべき必然性を主張するためには，言葉を生み出す精神という影を増殖し続けざるを得ないという回避し難い矛盾を指摘している。蝋燭と影の関係は本物とコピーの関係に等しいと認める一方で，画家らしき友人にその芸術性を理解したいからと作品を送るよう要望したり，写真は友人の本質を表わしていないと述べるのも，カーライルの誤謬をロレンスは批判するもののやむなしと共感を示していると考えられよう。

言語学者ソシュール（1857～1913年）(57) は言葉を「音声言語」と「文字言語」に区別し，音声の優位性を認めて音声中心主義を唱えた。そもそも言葉は「創世記」（『旧約聖書』）によれば姿なき神ヤハウエの霊が発した声であり，その意味内容をヘブライ文字で記したのが聖書である。天地が分離する以前，思惟する霊であった神以外に何も存在していなかった。いわば無の世界に神が言となって現前することによって神羅万象が姿を現したという。ソシュールによって，神が思惟する意味内容は「シニフィエ」，それを伝える言語表象は「シニフィアン」と名付けられた。言語表象は神の影となる音声言語と，それを代補するさらなる影としての文字言語に分類される。シニフィエとシニフィアンは，父なる神とその霊が受肉することによって誕生した息子イエスに置換されよう。イエスは父の言を語る肉体なのだ。源泉である神もその影も形而上学世界に内在する。これに対してロレンスが沈黙に価値を見出すのは，虚像に過ぎない影すなわち形而上学世界そのものを排除して生命力がみなぎる有機的自然世界の回復を祈願しているからに他ならない。

ハムレットは「何をお読みですか」と尋ねるポローニアスに「言葉，言葉，言葉」(Words, words,

words.)[58] と答える。彼もまた現世は神の言葉が生み出した影なる形而上学的虚像にすぎないという事実に気付き自身もその一員としてまた神の雛形として精神に囚われの身であることを知るからこそ「塵の塊にしか思えない。」と懐疑的な本心を表明することによって形而上学を批判していると解釈すべきであろう。言葉は彼にとって無意味で空しい存在であるが故に，三度も詠嘆するかのように繰り返すのである。

> What piece of work is a man, how noble in reason, how infinite in faculties, in form and moving how express and admirable, in action how like an angel, in apprehension how like a god: the beauty of the world, the paragon of animals—and yet, to me, what is this quintessence of dust? Act 2 Sc. 2[59]
>
> 人間は何とすばらしい自然の傑作だろう。その理性の気高さ。能力の限りなさ。形と動きの適切さ，すばらしさ。行動は天使さながら。理解力は神さながら。この世の美の神髄。動物の鑑—しかし，俺にとっては，何の意味もない塵の塊にしか思えない。

彼が人生最後の瞬間に親友ホレイシオに言い残した言葉も「沈黙」（the rest is silence. Act 5 Sc. 2）であった。形而上学から脱却する方法として，影なる言葉を捨て沈黙する必要性をロレンスのみならずシェイクスピアも訴えていると考えられる。ロレンス・オリビエが演じる映画『ハムレット』[60] では，ハムレット亡き後，彼の椅子に，かつて恋人オフィーリアが狂気に駆られ意味不明瞭な歌を口ずさみながら置いたローズマリーがそのまま残されている。花言葉は「記憶」。失恋の痛手に苦しみ正気を失いながらもハムレットに「忘れないでいてほしい。」と願うひたむきな恋心が本能的に成し得たことと兄レアティーズは理解する。しかし「記憶」という行為には，もはや写真や絵そして言葉のような影となる形が存在しないことから，形而上学世界からの離脱すなわちカオスなる源泉に回帰する試みが始まっていると解釈することも可能である。形而上学世界ではすべての物に名前が付けられているが，ハムレットとオフィーリアはこのような関係を断ち切ろうと無意識裏に試みているのだ。源泉で待ち受けているのは，様々な言を発することで形而上学世界を創出した神ヤハウエであるはずはない。オフィーリアが理性を喪失し狂人に変貌している事実から，理性を象徴するヤハウエが出現する以前の異教世界，すなわち原初の有機的自然世界であったカオスにハムレットとともに彼女自身も飲み込まれ再生の時を待つと考えても誤りではあるまい。

こうして，シェイクスピアが提示した「生と死」の関係は，ロレンスによって「肉体と精神」さらには「異教」と「キリスト教」の対立関係に転換されて，今や原初の無垢な「有機的自然界（フュシス）」と，禁断の実を食して神と同等の知性と理性を得た人類が秩序（ノモス）と技術（テクネ）を基に築き上げた「形而上学世界，すなわち文明世界」との対立関係へと発展する。

前述のジャン・パリスは「ハムレット＝レアティーズ＝フォーティンブラスのうちに同一人物の三つの相，三つの化身を見たくなる。」[61]，「もう一つの王朝の星の下に生命がこのドラマから再

生するためには，決闘が対立物を溶解しなければならず，〈息子〉を具現する最初の二人の人物が死んだ後，その〈息子〉がフォーティンブラスのうちに，つまり統一のうちに復活する。」[62] と述べて錬金術的作品解釈を深める。精神的なハムレットと行動的なレアティーズが精神と肉体あるいは硫黄と水銀という対立原理として決闘し両者が死んだ後に両性具有的なフォーティンブラスによって王国が再建されるというのである。三者が硫黄と水銀そして賢者の石という錬金術的様相を帯びていることは認め得るが，パリスの解釈を可能にするには，両性具有的な第一質料・カオスとして存在するハムレットの心奥でレアティーズが女性原理を司る影となって出現する過程と，両者が結合してフォーティンブラスが完全な人間として誕生する場面が必要であろう。しかしながら三者は，物語の開幕とほぼ同時にそれぞれ独自の人格を持つ既成人物としてすでに登場している。また，錬金術が鉛を黄金に変える金属変容の術であるとともに，迷える人間を悟りに導く精神変容過程をも意味するというユング（1875～1961年）[63] の心理学的解釈を想起するならば，鉛なる第一質料・カオスとして登場し憂鬱気質（メランコリー）を生じる心の闇を彷徨い，精神（硫黄・男性原理）か肉体（水銀・女性原理）かと自己分裂にさんざん苦しんだ挙句，死を甘受してようやく両性具有的な黄金・賢者の石に成り得て復活し自己実現に成功するのは唯一ハムレット自身であると考えるべきであろう。さらにパリスによれば，父王は「破壊された古い秩序」を象徴し，息子ハムレットには「新しい秩序の前兆」が見られるという。鋭い指摘であり共感を促すが，「新しい秩序世界」とはいかなるものか，その解釈については異議を生む。錬金術が実現可能な理想郷は有機的自然界であると考えられるのに対して，パリスは「神ウラノスは息子クロノス（時間）に，クロノスもまたその息子ゼウスによって制圧され敗北したというギリシア創世神話に倣って，カオス（ハムレット）は時間（レアティーズ）が導入されることによって完成し顕在化する（フォーティンブラス）。」と論じることから，有機的自然ではなく時間によって秩序付けられた形而上学世界・文明世界の実現を目指していると理解される。

> 暗殺された「父」のイメージには，新しい秩序の前兆が見てとれる。『ハムレット』はある文明の死ともう一つの文明の誕生との間の，神話的，精神的，社会的推移の表現である。この作品はそれゆえにこそ何よりもまず文明の誕生の問題，文明の転身の問題，端的に言うなら，〈継承の問題〉をわれわれに課しているのである。[64]

父王が築いた古き世界の外れた箍を直す使命を課せられたハムレットが成し得たのは，死んで腐敗するというデンマーク国家の宿命を自分のものとして受容することであった。彼の台詞「それなら，喪服は悪魔にくれてやり，黒テンの毛皮でも着るか。」（Nay then, let the devil wear black, for I'll have a suit of sables. Act 3 Sc. 2）は，喪を象徴する黒衣を脱ぎ捨てて復讐を果たす決意表明であると考えられよう。「黒テンの毛皮」は，旅役者にプリアモス王虐殺の場面を再現するよう指示する際にハムレットが口にした「復讐の黒き鎧」（sable arms）[65] が換言されたものであり，そ

の黒い鎧を身に着けたピュロスが父の殺害者パリスとその父プリアモスの二人に復讐を遂げた暁に返り血を浴びて赤く染まったことから，ハムレットの内部では復讐を止める理性から解放されて行動に踏み切る決断をするという大変革が起っていると考えられる。黒から赤への色変化は，鉛・カオスから黄金・賢者の石が誕生する錬金術作業過程を暗示する。従って彼が直面する死は，実現が待たれる「真実の世界」の到来を促すものであると予想できよう。ハムレットは，過酷な運命に翻弄され悪夢に苦悩しながらも懸案の復讐を果たしたばかりか，肥大した形而上学の脅威を破壊し決別するという偉業を我が身の消滅という思いにもよらぬ方法によってではあったが成し遂げた。実在するデンマーク王国に新世界を構築する夢はかなわなかったにせよ，彼の心の王国を再建するために必要不可欠な肉体の死と腐敗を忌み嫌いながらも直視しその中に意を決して没入したことは功績として評価されるべきである。錬金術思想は，既述の「ウロボロスの蛇」が象徴するように，男性原理と女性原理すなわち精神と肉体は互いに相手を求め合う補償関係にあると考える。本来ならば，両原理が闘争と調和すなわち溶解と凝固を幾度となく繰り返すことによって，蛇は再生し続けるはずである。この循環がデンマーク王国において停滞し両原理に分離せぬまま腐敗してしまっているのは，精神偏重肉体蔑視の見解を正当化して男性原理の優位性を主張するキリスト教の支配下にあって，両原理の対等な調和関係を求めて反旗を翻すことがいかに困難であったかを示している。キリスト教が掲げる「三位一体説」は，神と子イエスと聖霊が外見は異なるものの同一存在であることを意味するが，いずれも男性像で描かれる事実から，父権制に固執する宗教であると言えよう。さらに，三者による天と地およびその中間領域の分割統治という構想も明白であることから，キリスト教の絶大な権力の行使が宇宙全体に及び他の宗教を凌駕している事実をも誇示していると考えられよう。キリスト教が誕生する以前の形而上学世界においても肉体は生命力を欠いた無機的自然として精神に従属する卑小な存在であると見做されたせいで，今やデンマーク王国の肉体は腐り悪臭を放っているのである。

錬金術作業は，親鳥が羽の下に卵を抱いて温め孵化させる行為に等しい。第一質料を象徴する卵を鍋に入れて火にかけると，黄身と白身に例えられる男女両原理が分離し始める。やがて殻を割って誕生する雛鳥が両性具有の「黄金・賢者の石」を象徴しているのは言うまでもない。デンマーク王国は第一質料・卵に相当するが，女性原理が虐げられた結果溶けて男性原理に融合しているため対立も結合も起こり得ず，新たな生命の生成は行なわれない。ハムレットに課せられた役割は，死せる王国という固体に衝撃を与えて昇華させ分離を誘引するための起爆剤「火」を演じることであった。かつて敵対関係にあったフォーティンブラスと和解して後継者に定めデンマーク王国の再建を委ねた時，ハムレットはすでに優柔不断な性格を克服し精神と肉体の両原理を兼備したことによって，一国の主たるに必要な認識力・想像力（黄金・賢者の石）を得て「真実」を見極め懸命に責務を果たしたと言えるのではなかろうか。臨終の場で彼の心に去来したのは「無・虚無感・絶望感」ではなく，ロレンスが目指す「自己実現」を成就したことから得られる達成感に他ならず，ハムレットは黄金・賢者の石にふさわしい「真の王」に成り得たと結論で

きよう。

And so, according to his idea of fulfilment, man establishes the whole order of life. If my ful-filment is the fulfilment and establishment of the unknown divine Self which I am, then I shall proceed in the realizing of the greatest idea of the self, the highest conception of the I, my order of life will be kingly, imperial, aristocratic. The body politic also will culminate in this divinity of the flesh, this body imbued with glory, invested with divine power and might, the King, the Emperor. In the body politic also I shall desire a king, an emperor, a tyrant, glorious, mighty, in whom I see myself consummated and fulfilled. Thiis is inevitable! (66)

人間はその目指す成就達成の目論見にしたがって，生活の秩序全体を確立する。もし私の目指す成就達成が，私があるところの未知にして神聖な「自己」の成就達成であり確立であるとすれば，そのときには私は自己という最大なる観念，「私」という最高なる概念の実現に進むであろうし，私の生活秩序は王的であり，皇帝的であり，貴族主義的になるであろう。国家もまたかかる肉の神聖さにおいてその極に達するのであって，そのとき国は栄光で鼓吹され，神聖な力，権力である「王」「皇帝」を備えるに至るであろう。国家においてもまた私は王を，皇帝を，暴君を欲するであろう，栄光に満ちて力強く，そのうちに私自身が完璧に実現されているのを見る王，皇帝，暴君を欲するであろう。そうならずにはすまされぬのだ！

（※次号に続く）

註

（1）1971年2月に結成されたイギリスのロックバンド。構成メンバーはブライアン・メイ，ロジャー・テイラー，フレディ・マーキュリー，ジョン・ディーコンの4名。1991年にフレディが死去した後にジョン・ディーコンが脱退したが，ブライアン・メイとロジャー・テイラーの二人にボーカルのアダム・ランバートが加わり，「クイーン＋アダム・ランバートとして現在も活動している。

（2）1975年10月31日に発表された。作詞・作曲はフレディ・マーキュリー。クイーンのアルバム『オペラ座の夜』に収録。演奏時間は約6分で長すぎるという批判を浴びたが，変更することなく同年にシングルカットされ発売された。1992年に映画「ウエインズ・ワールド」の挿入歌に選ばれ再ヒットし，2018年には曲と同名の映画が公開され世界中から脚光を浴び続けている。曲の構成は，アカペラ，バラード，オペラ，ハードロック，バラードと5部構成で，オペラにおいてメンバー3人が暗闇の中で歌う世界初のプロモーションビデオが挿入されたことでも注目された。

（3）Queenのボーカリスト。本名はFarrokh Bulsaraであったがqueen結成時にFreddie Mercuryに改名した。両親はゾロアスター教徒。出生地は，アフリカのタンザニアにあるザンジバル島のストーン・タウン。幼少期を過ごしたインドでスクールバンドのメンバーとしてピアノを演奏するなど，すでにその才能を発揮し始めていた。1963年に故郷ザンジバルに戻ったものの革命が起ったため家族とともにイギリスに移住し大学でグラフィックデザインを学んだ。1970年にブライアン・メイとロジャー・テイラーが所属するバンド「スマイル」に加わり，彼の提案でバンド名をQueenに改名した。HIVに感染し免疫不全に伴う気管支肺炎を発症したのが原因で1991年11月24日に死去した。

（4）『大辞林』第3版

（5）舞台演出家　詳細不明

（6）William Shakespeare, *Hamlet, The Arden Edition of the Works of William Shakespeare,* Edited by

Harold Jenkins, (Methuen London and New York 1982) p. 277
河合祥一郎訳『新訳　ハムレット』角川文庫（角川書店　2008 年）p. 98
（7）今西雅章編註，『マクベス』（大修館書店　1987 年）p. 272
木下順二訳『マクベス』岩波文庫（岩波書店　2010 年）p. 131
（8）水井万里子著『図説チューダー朝の歴史』（河出書房新社　2011 年）p. 90
（9）ibid. p. 118
（10）指昭博著『図説イギリスの歴史』（河出書房新社　2014 年）p. 58
（11）『図説チューダー朝の歴史』p. 126
（12）『図説イギリスの歴史』p. 58
（13）黒川正剛著『魔女狩り』（河出書房新社　2011 年）pp. 102-3
（14）King James VI, *Daemonologie, 1597*
1590 年に起こった「ノース・ベリックの魔女事件」に端を発して魔女の存在およびその魔力を信じるに至ったスコットランド王ジェイムズ 6 世が，「魔女は国家反逆罪の罪に問われ裁判で厳罰に処せられるべし」という自論を主張し魔女迫害を支持した書籍で，スコットランドおよびイングランドで広く流布し魔女狩りを激化することになったと言われる。
（15）『図説魔女狩り』pp. 110-1
（16）『日立世界不思議発見〈ローマ・天使と悪魔・ガリレオ・コードの謎を解け！〉』2009 年 5 月 9 日，TBS テレビ
（17）若桑みどり著『ヴィーナスの誕生』JALPAK・ハンドレッドブックス（ジャルパックセンター 1983）p. 85
（18）Aurelius Augustinus, *De Civitate Dei Contra Paganos Vol.19*（ラテン語　異教に対する神の国の意）全巻 22 巻。異教徒によるキリスト教徒迫害は異教の神々の道徳的堕落に起因すると考えて，キリスト教に改宗するよう説く。「神の国」はイエスが提唱する愛に基づく精神的な世界で「地の国」は世俗世界である。教会は「地の国」において「神の国」を表象するものとして優位性を持つと考える。
（19）『ヴィーナスの誕生』pp. 81-3
（20）丘沢静也訳，ニーチェ著『ツァラトウストラ（上）』光文社文庫（光文社　2014 年）p. 18
（21）D. H. Lawrence *"Let The Dead Bury Their Dead"* (The Complete Poems of D. H. Lawrence 1 Collected and Edited with an Introduction and Notes by Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts, Heinemann: London 1964) pp. 440-1
Let the dead go bury their dead, don't help them. Let the dead look after the dead, leave them to one another, don't serve them……O cease to listen to the living dead. They are only greedy for your life!
（22）William Shakespeare, *Hamlet, The Arden Edition of the Works of William Shakespeare,* Edited by Harold Jenkins, (Methuen London and New York 1982) pp. 210-1
河合祥一郎訳『新訳　ハムレット』角川文庫（角川書店　2008 年）pp. 40-1
これ以降『ハムレット』の邦訳は上記の書籍によるものとし，引用箇所は英語原文の註に併記する。
（23）ibid. p. 273　訳　p. 94
（24）ibid. p. 187　訳　p. 24
（25）ibid. pp. 216-7　訳　pp. 45-9
（26）ibid. p. 208　訳　p. 41
（27）*Hamlet*, Act 3 Sc. 3 p. 314
O, my offence is rank, it smells to heaven; It hath the primal eldest curse upon't ---- A brother's murder. Pray can I not, though inclination be as sharp as will, my stronger guilt defeats my strong intent, and, like a man to double business bound, I stand in pause where I shall first begin, and both

neglect.
ああ，我が罪はおぞまし，天まで悪臭を放つ。人類最初の罪 ── 兄弟殺しの罪の呪いだ。祈ることはできない。祈りたい，いや祈らねばと思うのだが，その思いより強い罪の思いに押しつぶされる。まるで，2 つの仕事を前にして，どちらにも手をつけられぬまま，立ちすくむように。(p.127)

(28) ibid. pp. 246-7　訳　p. 75
(29) ibid. pp. 250-1　訳　pp. 77-8
(30) ibid. p. 321　訳　p. 134
(31) ibid. p. 227　訳　p. 55
(32) ibid. p. 55
(33) ibid. p. 55
(34) ibid. p. 393　訳　pp. 196-7
(35) ibid. pp. 277-80　訳　pp. 98-100
(36) ibid. p 397　訳　p. 201
(37) ibid. p. 407　訳　p. 207
(38) ibid. p. 414-6　訳　pp. 215-6
(39) ibid. pp. 183-4　訳　pp. 21-2
(40) Jean Paris, *Hamlet ou les Personnages du Fils* (Edition du Seuil, 1953)，植田祐次訳『ハムレット ── 構造分析的試論 ──』(国文社　1984 年) pp. 131-2.
(41) ibid. p. 68
(42) 河合祥一郎訳『新訳　ハムレット』角川文庫 (角川書店　2008 年) pp. 223-8
(43) D. H. Lawrence, *Twilight in Italy, (The Cambridge Edition of The Letters and Works of D. H. Lawrence,* Edited by Paul Eggert, Cambridge University Press 1979)
(44) ibid. pp. 145-6
(45) 小川和夫訳，『D. H.ロレンス紀行・評論選集 ── イタリアの薄明 ──』(南雲堂　1987 年) p. 127
(46) *Twilight in Italy* p. 144　訳　p. 122
(47) *Hamlet* pp. 345-6　訳　pp. 155-6
(48) ibid. p. 279　訳　pp. 99-100
(49) *Twilight in Italy* p. 147　訳　p. 128
(50) D. H. Lawrence, *Sons and Lovers*, (*The Works of D. H. Lawrence* Edited by Paul Eggert, Cambridge University Press 1979) p. 182
D. H. ロレンス著　伊藤整訳『息子と恋人』(『世界文学全集 17』河出書房新社)。p. 151
(51) 荒俣宏編『世界神秘学事典』(平河出版社　1982 年) p. 28
(52)「隠れたる神」は，ロレンス著 *The Plumed Serpent*『翼ある蛇』において Dark Sun とも換言される。
(53) *Sons and Lovers* p. 182　訳　p. 151
(54) D. H. Lawrence, *The Collected Letters of D. H. Lawrence*, Edited by Harry T. More (Heinemann London 1977) p. 180
(55) ibid.
(56) D. H. ロレンス著「アーネストコリンズ宛の手紙」 オルダス・ハクスレー編，伊藤整訳，『D. H. ロレンスの手紙』(彌生選書　1971 年) p. 86-7
(57) Ferdinand de Saussure (1857～1913 年)　スイスの言語学者で「構造主義言語学の父」と言われる。
(58) *Hamlet*, Act 2 Sc. 2 p. 247，訳『ハムレット』p. 75
(59) ibid. p253-4　訳　p. 80
(60) 映画『ハムレット』，1948 年にイギリスで製作・公開された。監督およびハムレット役はローレンス・オリヴィエ

(61)『ハムレット ── 構造分析的試論 ──』p. 49

(62) ibid. pp. 54–55

(63) Carl Gustav Jung（1873～1961 年），スイスの精神科医・心理学者で，深層心理学の研究者。その著書『心理学と錬金術』で「錬金術」について，「鉛を黄金に変える方法である」という従来の定義に加えて，「人間における精神変容の方法」という新たな解釈を示した。

(64)『ハムレット ── 構造分析的試論 ──』p. 47

(65) The rugged Pyrrhus, he whose sable arms, black as his purpose, did the night resemble when he lay couched in the ominous horse, hath now this dread and black complexion smear'd with heraldry more dismal. Head to foot now is he total gules, horridly trick'd with blood of fathers, mothers, daughters, sons, bak'd and impasted with the parching streets, that lend a tyrannous and a damned light to their lord's murder. Roasted in wrath and fire, and thus o'ersized with coagulate gore, with eyes like carbuncles, the hellish Pyrrhus old grandsire Priam seeks. Act 2 Sc. 2 pp. 263-4

荒武者ピュロスは復讐の，黒き鎧に身を固め，木馬の腹に潜むとき，夜と見まごうその姿。今や顔を朱に染め，全身くまなく塗られたる，唐紅の紋様は，父母同胞を殺した血。街の炎が赤々と，王殺害の道しるべ，地獄の道を照らし出す。怒りと炎に身を焦がし，阿修羅ピュロスは血をまとい，眼はさながら柘榴石，闇に光りて赤く燃え，老いたるプリアモスをば求めたり。 訳 pp.86- 7

(66) *Twilight in Italy,* p. 146 訳 p. 126